

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第1回

OECD（経済協力開発機構）では、2000年に最初の本調査を行い、以後3年ごとに、義務教育修了段階である15歳の生徒を対象とした国際的な「生徒の学習到達度調査」（PISA）を実施している。PISAは「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」を主要3分野として調査しており、2003年調査には41カ国・地域から約27万人、2006年調査には57カ国・地域から約40万人が参加した。

2003年調査には、日本から全国の高等学校等の1年生約4,700人が参加したが、数学的リテラシーも科学的リテラシーも1位グループであったのに対して、「読解力」だけが14位であり、日本の教育関係者は大きな衝撃を受けた。いわゆる「PISAショック」である。2006年の調査では日本の読解力は15位であった。

PISAでは、15歳児が持っている知識や技能を、実生活のさまざまな場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価している。知識の習得だけではなく、「活用」が重視されているのが日本の「学力」と異なっている点だ。

しかし、現在、「学力」のとらえ方は変化しつつある。

例えば、知識の活用は、全国学力・学習状況調査でもB問題として出題されたほか、2007年6月に公布された学校教育法の一部改正により^(*)、「学力」の重要な要素は、

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 学習意欲

であることが示された。教育の基本理念は「生きる力」の育成であり、次期学習指導要領でも基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視した上で、思考力・判断力・表現力等を育むことが目標となっている。

このように「学力」が変化する中で、どのようにすればPISA型読解力（reading literacy）や思考力・判断力・表現力等は育むことができるのか、本誌でレポートしていく予定である。

第1回目は、まず、PISA型読解力とは何か、PISA型読解力向上の指導のポイントは何かについて、「リーディング・リテラシーを育てるためのカリキュラム、学習指導・評価方法の開発」の研究代表者である国立教育政策研究所統括研究官の有元秀文氏にうかがった。

PISA型読解力とは何か 生徒にPISA型読解力を身に付けさせるための 指導のポイント

国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部 有元秀文統括研究官に聞く

自由記述型問題で 無答率の高い日本の高校生

——日本の高校生の読解力は低いのでしょうか。

日本はPISAの2003年調査では参加41カ国中14位でした。8位から14位へと順位が下がったことと同時に、24点という低下幅が参加国・地域中最大だったことが衝撃を与えました。この最大の要因は、自由記述問題の無回答率の高さです。PISAの読解力調査では、多肢選択型、求答

型、短答型、自由記述型の問題が出題されますが、日本の高校生の無答率は、参加国平均15.6%に対して23.7%と際立って高く、私たちはそれを問題視しています。これは数学や科学においても同様であり、以前から日本の子どもは記述問題が苦手であることは分かっていました。PISAでは自由記述問題<問題例1>が4割を占めたため、日本の高校生の弱点が大きく浮かび上がったのです。

日本の高校生が自由記述問題を苦手とする原因は、欧米と日本のテストの違いにあります。PISAはオープンエンドの解答が複数ある問題に対し、日本のテストは正解が1

(*) 学校教育法第30条第2項

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」

<問題例1> 「落書きに関する問題」(PISA2000年調査問題)

- 問1 省略
- 問2 ソフィアが広告を引き合いに出している理由は何ですか
- 問3 あなたは、この2通の手紙のどちらに賛成しますか。片方あるいは両方の手紙の内容にふれながら、自分なりの言葉を使ってあなたの答えを説明してください。
- 問4 手紙に何が書かれているか、内容について考えてみましょう。
手紙がどのような書き方で書かれているか、スタイルについて考えてみましょう。
どちらの手紙に賛成するかは別として、あなたの意見では、どちらの手紙がよい手紙だと思いますか。片方あるいは両方の手紙の書き方にふれながら、あなたの答えを説明してください。

*問題については、文科省ホームページ
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813.htm)
などを参照。

つの問題がほとんどです。さらにPISAの問題は、与えられたテキスト(課題となる問題文)に基づき、その内容を踏まえて個人の意見を述べることを求めています。欧米ではこうした問題がテストに出題されていますが、日本のテストでは、ほとんど見受けられません。つまり、日本の高校生は自分の意見を述べたり、テキストの中の情報を抽出したり、記述する形式の自由記述式の出題に慣れていないために無回答率が高かったのです。

——日本の国語のテストとPISA型テストがどのように違うのか、具体的に教えてください。

<表2>のように、国語のテストでは、文学作品や評論文などの文章が多いのに対し、PISAでは「図表・グラフ・地図など文章以外も含む」「生徒の興味関心と密着」「マニュアルや応募書類など実生活に密着」「理科や社会などに関連した幅広い領域」の文章です。質問の形式は、国語では選択肢問題がほとんどに対し、PISAでは6割が多

肢選択問題、残り4割は記述式問題です。質問の内容も、国語では鑑賞力を問うような問題が多く、解答の根拠がテキストとは関係のない意見でも正解となるのに対して、PISAでは問題文中から読み取れる根拠に基づいた上で自分の意見を述べることが求められます。さらに、PISAでは「あなたはこの終わり方に賛成ですか」など、問題文の評価が求められています。

PISAでは読解力を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力」と定義しています。ですから、質問の形式・内容がこのようなのです。

● クリティカル・シンキングを問う
● PISA型読解力テスト

——PISA型読解力を通じて求めている能力とは何でしょうか。

PISAが求めているのはテキストが本当のことを言っているのか、内容や文体が本当に価値の高いものなのかを疑ったり、評価したりするクリティカル・リーディングです。クリティカル・リーディングの基盤はクリティカル・シンキングであり、事実を正確に理解し、分析し総合して、問題点を発見して課題を解決する思考法です。クリティカル・シンキングは全教科において必要であり、特に国語や社会、理科に関係しているのがクリティカル・リーディングです。

——クリティカル・シンキングを身に付けて、何をしますか。

課題解決です。知識の活用とは現在ある問題を解決することであり、PISAの最終目標は課題解決なのです。クリティカル・シンキングは、欧米で最も大切にされている能力の1つで、欧米の子どもたちは、子どものころから発言や行動について、なぜそう考えたか、行動したのか、理由

<表2> 国語のテストとPISA型読解力テストの違い

| | 従来日本でよく行われてきた国語のテスト | PISA型読解力テスト |
|---|--------------------------------------|------------------------------|
| 1 | 選択肢問題がほとんどを占める | 記述式問題が約4割を占める |
| 2 | 文章がほとんどである | 表やグラフ・地図など非連続テキストが約4割を占める |
| 3 | 生徒の興味関心とかけ離れたことが多い | 生徒の興味関心を重視している |
| 4 | 実生活とかけ離れた趣味的な課題が多い | 実生活と関連の深い課題が多い |
| 5 | 文学や評論がほとんどである | 理科・社会などに関連した幅広い領域から出題される |
| 6 | 読んだことについて、教師が与えた唯一の正しい答えのみを答えることを求める | 読んだことについて、自分独自の意見を表現することを求める |
| 7 | 自分の体験や主観的な臆測に基づいた意見でも容認されることが多い | 意見の根拠が必ず本文の中になければならない |
| 8 | 本文を無批判に受け容れて感動することを求められることが多い | 本文について評価したり批判したりすることが求められる |

(有元先生作成)



＜表3＞PISA型読解力を育てるための目標

| | | |
|-----|-------------|---|
| 目標① | 【情報の取り出し】 | 全文を理解して、読解に必要な情報を取り出し、自分の言葉で説明できる。 |
| 目標② | 【解釈】 | 全文を理解して、筆者の意図や登場人物の思考や行動について推論し、自由記述問題で本文に書いてあることを根拠にして、自分の意見として表現することができる。 |
| 目標③ | 【熟考・評価】 | 全文を理解して、自分の考えや体験と結びつけ、文章や登場人物を評価・批判し、自由記述問題で、本文に書いてあることを根拠にして、自分の意見として表現することができる。 |
| 目標④ | 【学習課題の発見】 | 全文をよく理解した上で、テキストを理解するために必要な学習課題を自分で考え出すことができ、グループの中で話し合っって最も適切な学習課題を決定することができる。 |
| 目標⑤ | 【討論による課題解決】 | 与えられた学習課題や自分たちで考え出した学習課題について、グループで話し合っって、本文に書いてあることを根拠にして、お互いに建設的に話し合い、課題を解決することができる。 |

(有元先生作成)

を問われます。

従来、日本では根拠を曖昧にしたままで意思決定を行うこともありました。しかし、国際化社会を迎えた今日、外国人と一緒に働く、国際的な場面で意見交換をすることは珍しくありません。さらに、地球環境問題をはじめとして国際的に解決しなければならない課題も山積しています。このとき、他国と対等に議論する能力は必要であり、議論を重ねて合意形成をしなければなりません。PISA型読解力やクリティカル・シンキングを身に付けることは、今後、国際社会の中で生きるのに大切なことなのです。

理由を挙げて 意見を述べる習慣を付ける

— どうすれば、PISA型読解力が付くのでしょうか。

まず生徒に書かせることが必要です。日本でも記述問題がありますが、これまでは記述問題を「表現」の問題と考え、「読解」の問題として取り扱ってきませんでした。PISAでは表現と読解を一体として捉え、思考の過程を見るために表現させています。選択肢から選ばせると思考の過程は見えませんが、子どもたちが文章から何を読み取り、どのように考えてその結論を導き出したのかを知るためにも、記述させることは必要です。

PISA型読解力を付けるには、＜表3＞のように5つの段階を踏んで、文章の理解から意見の形成、表現、課題解決に導く力を育成していきます。①情報の取り出しと②解釈は、国語教育でも行われています。③熟考・評価は、授業で生徒に自分の意見を発言させる教師はいますが、テストで書かせる教師はほとんどいません。④⑤は生徒同士グループで話し合わせることによって身に付きますが、①～③がきちんとできていることが前提ですし、生徒自身に話し合う力も必要です。ですから、まず①②③をしっかり行い、生徒が理由を挙げて意見を言える力を育成する必要があります。理由は自分の体験や憶測をもとにしたものでは

なく、テキストに書いてあることを根拠にすることを徹底しなければなりません。

— 具体的には、どのような授業をするとよいのでしょうか。

まず、教師が考える正解を生徒に押しつけないことです。間違ってもよいので、生徒に自分で考えさせることが大切なのです。

また、授業時間数には限りがありますから、精読主義を改める必要があるでしょう。精読主義は、精読しないとすべての単語の意味は分からない、内容を理解できないという立場です。1段落ずつ精読していきますので、文章全体を見渡した読みができません。欧米では、文章全体を通読し、全体に関する質問をして、生徒の理解を促します。フィンランドの教科書を見ると、各段落や単語についての問いはありません。テキストに書かれている内容について、全体の理解を促す質問をして、理由を挙げて解答させるようにしています。

発問を変えることで PISA型読解力を伸ばすことができる

— 現在の日本の国語の教科書では、PISA型読解力をつけるのは難しいでしょうか。

そんなことはありません。現在の教科書でも、発問を変えることによって、PISA型読解力を伸ばすことができます。例えば、『走れメロス』であれば「なぜ、友だちを人質にしたのか」など、全体の構造を見通し、その答えがテキストの中に書かれている発問をすることによって、PISA型読解力を身に付けさせることができます。

私は、現在の日本の国語の授業のやり方をすべて変える必要があると言っているわけではありません。全体の授業の中で2～3割程度、こうした発問を入れるだけでも、PISA型読解力を身に付けることができます。ただし、発問は文章の全体の構造を理解し、文章の核心をつく質問でなければなりません。

また、国語だけでなく、算数・数学、社会、理科など他教科でも、テキスト中の根拠を挙げて自分の意見を述べさせることが大切です。PISAでも、理科では二酸化炭素の増加と地球温暖化を示すグラフを比較して意見を述べる問題が、数学ではグラフを読んで内容を記述する問題が出題されています。

教師が生徒の回答を聞く時のポイントは、テキストに書かれていることを根拠にしているかどうかです。PISAの採点基準もそこを見えています。

● 発言の前に、生徒が全員 ● 自分の意見を書くことからスタート

——生徒に発言させるといっても難しそうです。質問されても押し黙ってしまう生徒もいるかもしれません。

確かに、「なぜか」「どうしてか」を聞かれたことのない子どもがほとんどかもしれません。導入にあたっては慎重な対応が必要です。最初は、教師の意見を押しつけないようにして、生徒がそう思う理由を言わせませう。根拠が足りないから、生徒の回答内容に不満があるからといってその答えを否定せず、回答を聞き、その上で足りない部分を考えさせることを促す質問をするとよいでしょう。

教師にとって、自分の意見を先に言ってしまうことは難しいことかもしれません。時間が足りないと、教師が解説することになりがちです。しかし、教師の話を一方向的に聞いたり、教師の話に納得がいかないまま授業が進んでいったりするのでは、生徒のPISA型読解力は伸ばせません。それに、教師も授業時間中話を続けるのは疲れるでしょう（笑）。ですから例えば10分程度、生徒に話し合いをさせることから始めてみてはどうでしょうか。

実際の生徒の様子を見ていると、意見や理由を言ったり、ましてや質問をして評価もすることはかなり難しいようです。最初から口頭で発言させようとするのではなく、全員にノートやワークシートに根拠や意見を書かせて、その上で発言を促すのが効果的です。すべての生徒に書かせることで、発言しない生徒も自分の意見を考えることとなります。また、生徒の議論に任せて結論を出させようとしても難しいでしょう。基本的な知識は教えなければならないので、教師が教える部分と話し合わせる部分のバランスが大切です。

いずれにせよ教師の力量が問われます。すぐにPISA型読解力の指導力を高めることは難しいことかもしれません。まず、発問の仕方を模倣してみる、授業研究会などを開いてお互いに学びあうことから始めることが必要



【プロフィール】 有元秀文先生

東京都立新宿高等学校教諭、文化庁文化教育部国語課国語調査官、国立教育研究所教科教育研究部主任研究官などを経て、現在、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官。著書に『子どもが必ず本好きになる16の方法 実践アニメーション』（合同出版、2005年）、『「国際的な読解力」を育てるための「相互交流のコミュニケーション」の授業改革～どうしたらPISAに対応できるか～』（溪水社、2006年）、『必ず「PISA型読解力」が育つ7つの授業改革—「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法—』（明治図書、2008年）など多数。

です。

● 小論文もPISA型読解力を問う問題 ● 今後は日本でも求められるPISA型学力

——生徒自身の考え方を問う問題は、大学入試では小論文でも出題されていますが、小論文はPISA型読解力を問う問題ですか。

課題文の長さや質問にもよりますが、テキストを理解して自分の意見を述べるという点では、PISA型読解力の問題と同じです。しかし、PISAでは、まず結論部分である自分の意見を明確にし、その根拠を列挙するという書き方を求めています。日本の文章の書き方である「起承転結」や「序論・各論・結論」という書き方とは異なる点がありますね。また、PISAの採点では解答者の主観的な考えにならないように、テキストを正確に理解し、根拠を挙げて自分の意見を書くことを求めています。そのため採点も非常に細かい基準ではなく、3点、2点、1点、0点といった大きくりの採点をしています。

小論文では採点の手間が懸念されますが、出題を工夫することで手間を省くこともできるでしょう。意見の根拠と意見を分けて書きなさいとか、グラフと文章に触れて意見を述べなさいといった条件を設問に入れておくと、条件を満たしているかで採点することが容易になります。

——今後、日本で求められる学力は、PISA型に変わっていくのでしょうか。

PISAで問われる力は、国際社会で生きて行く力そのものですから、変わっていくことは確実だと思います。しかし、問題はいつ変わるかです。高校入試では、PISA型の設問が少しずつ増えてきました。われわれも、カリキュラム・指導・評価方法を蓄積し、公開していきたいと思えます。日本の子どもは、基本的な読み書きのリテラシーは高いので、教師が指導すればPISA型読解力を付けることはできると思います。